

ラオスのこども通信 16号

(2000年3月発行)



特集：ラオス人スタッフが見た日本の図書館活動

ラオス人スタッフ来日研修報告 [1999年11月6日～21日]

ラオス事務所の責任者ソンペット、子ども文庫担当パンオーン、サイヤプリ子ども文化センターの館長プアチャンの3人が来日。図書館や児童館、文庫や学校などの現場視察を中心に約2週間の研修を行いました。一行は行く先々であたたかい歓迎を受け、子どもたちとふれあいました。それぞれの視点で学んだ研修について報告します。

なお、今回の研修は、日本財団の助成を受けて行われました。

＜研修の目的＞

●日本の読書活動や情操教育の現場（施設と活動）

を視察する。●日本で読書活動や情操教育に携わる指導者との意見交換や、子どもたちとの交流を図る。●現地活動の報告や「語り」「紙芝居」などの実演を通して、ラオスの文化と活動の成果を日本社会に伝える。

＜研修先＞

地域に根ざした手づくりの活動の現場から学ぶことに重点を置き、研修先を選びました。工夫と意欲で効果的な活動を行うことを学んでほしいからです。

この報告書は、日本財団のボランティア支援を受けて作成しました。

ラオス・スタッフの日本研修日誌

11月9日(火)～11月20日(土)

11月7日(日) ●池上梅園内の和室で交流会

支援者の方やボランティアなど約30人が集い、日本庭園を眺めながらひとときを過ごした。

昼食は「各自一品持ち寄り」方式にソンベツトが感心。これで低予算で会合ができる、と。

公文国際学園図書委員会から寄付金とラオス語を貼った絵本が寄贈。目玉イベントは茶道。着物姿の本橋さんから茶の心を聞く。ラオス人チームから「おもてなしなのになぜ黙っているのか」と質問が出る。

* * *

11月8日(月) ●大田区立池上図書館

3人は、日本人が静かに本を読むことに驚いたようだ。図書の貸し出しや本の配置など基本的なことを教わる。その場で貸出カードを作り、コンピュータ管理の図書サービスを実演してみせる。

区内の図書館が閉館日をずらしていることや共通の貸出しカード、来館者が自分で本を見つけられる工夫などに注目。

子ども向けのコーナーでは、図書や紙芝居の購入方法や予算について質問。ふだん財政面に頭を悩ませているため、全区の予算(税金)だと聞き、ラオスとの大きな差を感じていた。

●子供の部屋保育園(大田区)

昔のような自然と共にある生活が、子どもの成長にとって重要で不可欠だと考え、実践している私立の保育園。子どもたちは泥遊びや、カナヅチを使つての工作など、自由に遊ぶことができる。園長先生曰く、危ないと思われるカナヅチにしても、子どもに触れさせなかったり、大人が教え込んだりするのではなく、自分で使うことで子どもは自然に学んでいくのだとのこと。

お昼寝の前に、子どもたちにラオスの紙芝居や童謡などを披露。はじめて日本の子どもたちの前でお話をしたが、子どもたちがうちとけて喜んでくれたので、3人は自信をつけた。

* * *

11月9日(火) ●大田区立南馬込児童館

「東京は遊び場が少ないので、児童館が利用されている」と館長の説明。夏はお祭り、冬はパーティーなど、年間を通じて催し物がある。小学生

が中心だったが、乳幼児と母親にも開放。若い母親の情報交換の場にも。中学生も時々ストレスを発散しに、卓球をしたり、小さい子の相手をする。

施設を案内してもらくと、子どもたちがどっと集まってきた。図書室の入口に「ラオスからお客様が来ます!」とポスターが貼りだしてあり、歓迎ムード満点。持参したラオスの紙芝居を3人が役を分担して実演した。ぶっつけ本番だったのでちょっと失敗した、と3人は残念がっていた。

* * *

11月10日(水) ●大田区立池雪小学校

絵本2000冊運動に参加している同校ユニセフボランティアの協力で子どもたちがみな「サバイディ」との挨拶に一同感激。

学校運営やカリキュラムの説明に、23年間小学校教員を勤めたブアチャンは次々と質問。国語、算数、図工、図書の時間、体育などを見学。休み時間に、ユニセフボランティアのみなさんがラオス語の翻訳を貼った絵本を届けてくれた。一緒に給食もごちそうになる。

●藤の台文庫(地域文庫/町田市)

団地のお母さんたちが廃品回収で集めた資金で建てられた文庫。

30人ぐらいの子どもとお母さんたちが、ラオスの話を聞きたいと待ちかまえてくれた。ラオスの紙芝居と「おおきなかぶ」を披露。ラオス語の数え歌を子どもたちに教え、みんなで歌った。

貸出は母親が行い、手書きでカードに記入しているところなど、親しみを感じた様子。ボランティアによる運営や資金の調達にも注目していた。

●かえで文庫(地域文庫/町田市)

ボランティアのスタッフと、常連の小学4年生の女の子1人が迎えてくれた。本が大好きで1年生から通っているという彼女が「ろくろくくびのはなし」などを読んでくれた。日本のお話を紹介してもらい、3人はとても感激。ゆっくりと日本の子どもと会話ができたことも収穫だった。

20年ほど運営しているが、利用者が減ってきているという。それは日本とラオス共通の問題。

* * *



11月11日(木) ●町田市立さるびあ図書館

もとは町田市の中央図書館であったが、現在は、青少年も含めた子ども向けの図書を多くおいている。たまたま休館日であったが、ご好意で特別に見学させていただいた。

待機していた図書館車も少し見学。ラオス国立図書館にも日本から寄贈された図書館車が何台もあるので、初めて見るわけではないが、蔵書の数には驚く。

一般には入れない書庫も見せていただき、図書館の幅広い役割を勉強。大田区の図書館と同様、市内の図書館がネットワークを組んで運営しているという点に3人の関心が集まった。

文庫連絡会の方から書籍購入費として寄付をいただき、さっそく参考資料として手芸の本を購入した。

●町田市立第四小学校

校長先生は、3年前のパダベットの研修でもお世話になった方で、3人にラオスのことをいろいろと質問された。

校長先生の案内で図書館を見学。現在のところ司書のいない平均的な学校図書館。図書の購入予算など、学校運営との関わりについて質問が多く出る。図書を貸出したり、新聞を作って掲示したりする図書委員会の活動に注目。また、図書の分類と配架を色分けし、動物の絵で示すなど、小学1年生でも図書が探しやすい工夫に感心した。

●へそ文庫(家庭文庫/町田市)

自宅の一部を改造して開いている「家庭文庫」という形態に驚く。ラオスの踊りを教えたり、日本の手遊びを子どもたちから習ったりと和やかな雰囲気。ラオスの紙芝居と「おおきなかぶ」をラオス語で披露。増山さんの語りで「3まいのお札」を聞く。お話会のはじめとおわりにみんなで短い

歌を歌うなど、「幕を上げて下ろす」お話の時間の区切れ目の大切さも教わる。

* * *

11月12日(金) ●都立小山台高等学校図書館

日本の高校の図書室が見たいというのはスタッフからの希望。ラオスで高校への図書室整備に力を入れ始めたところなので、関心が高いのだ。

図書館では、10人ほどの生徒が雑誌を読んだり勉強をしていた。司書の岡田さんの案内で見学。個人情報保護のため、貸出カードに誰がどんな本を借りたかという記録は残らない。分類にそった書架のほか、絵本コーナー、大学受験や進路の資料、新刊紹介、話題の本など、テーマごとに編集された展示が行われているのがラオスから見ると新鮮。図書委員長も参加して質問に答えてくれた。

ブアチャンは、サイヤブリ子ども文化センターの広報誌に図書委員長のインタビューを掲載すると約束した。

* * *

11月13日(土) ●東京小中学生センター(板橋区)

伊藤忠記念財団が設置している施設。同財団の佐藤さんからお話を伺った。20数年前、若い人が自分で勉強できる場としてスタートした。その後子どもたちのニーズが変わり、遊び場・たまり場を作ろうと、施設に手を加え、現在のセンターになったとのこと。

センターでは子どもたちが自由に施設を使って遊んでいる。工作室には様々な材料や道具があり、指導員もいるという。音楽スタジオ、自習室などもある。渡り廊下で他から独立した図書室。館内で子どもがぶつかりあっても、それを解決するのは子どもたち自身との考えで、あえて狭くしてあるそうだ。

子どもたちが企画運営し、地域に開放する手作りのイベントは、子どもの自由な発想を発揮する場であり、センターの活動を地域の人に知ってもらう機会になっている。

●東京子ども図書館(中野区)

財団法人が運営する私立図書館。いまでは子どもの本や語りなどに関わる人にとって大きな存在だが、ルーツは家庭文庫だという。

小さなホールと絵本・児童書のコーナー、資料室がある。

おはなしに適した創作や各国の昔話などを集め

て出版したり、語り手を育てる講座を開くなど、おはなしの普及に力をいれている。

3人が最も感銘を受けたのが、子どもに読ませたい本を選ぶ、ということ。そのために職員は3ヶ月で500~700冊も読むそうだ。

館長の松岡享子さんのお話。「親を集めて本が大事だ、と話すより『おはなし』を聞かせて、楽しかったと思ってもらう。それが子どもに伝わる」もの。

「子どもを相手に仕事をすることは希望があるでしょう。だからとっても幸せなことですよ。」3人は深くうなずいていた。

* * *

11月14日(日) ●神奈川県手づくり紙芝居コンクール

会場でラオス・カンボジアなど海外の紙芝居も展示されることになり、会も協力。また、やべみつのりさんの記念講演「双方向のコミュニケーション〜ラオスの紙芝居普及の体験から」の中で、ラオス人スタッフが紙芝居を実演した。

100人ほどの人が見守る中、プアチャンがやべさんのセミナーで制作した「なんのあしかな?」を堂々と披露。バンオーンは「さかなのおんがえし」をやさしい声で実演。ソソベットは、始まりと終わりにラオスの銅鑼をたたいて盛り上げた。

コンクールではやべさんの教え子の大学生も受賞。日本とラオスの教え子の競演となった。

小学生が自作を演じるのを見て、3人は目を細め、ラオスでも、子どもも紙芝居が作れるようにしたい、と言っていた。催しのあとは交流会。日本を楽しんで、とカンパもいただいた。

* * *

11月15日(月) 休日 鎌倉見物

前日・前々日と長野ヒデ子さんのお宅にステイさせていただいた。やべみつのりさんも合流し、長野さんのお知り合いの方々の案内で雨の鎌倉を散策した。大仏との記念写真はいい思い出に。

海のない国から来た3人は、念願の海をバックに写真をたくさん撮っていた。

* * *

11月16日(火) 報告会打ち合わせ

* * *

11月17日(水) ●精興社

埼玉県朝霞市にある児童書の印刷で知られる印刷会社。工場見学をしながらカラー印刷

の仕組みや校正の仕方を学ぶ。案内をして下さった宮崎さんは、「昨夜、娘と地図を見ながらラオスを調べたんですよ」と帰り際に笑って話してくれた。

●福音館書店

絵本がどういう編集作業を経て作られているのか、「こどものとも」編集部の井上博子さんから、実際の作品を例に挙げながら教えていただく。ラオスでは編集者と呼べる人材が育っておらず、質の高い本作りはまだまだだ。井上さんの編集に対する厳しい姿勢に、プアチャンの感想は「目からウロコが落ちた」。

●現地活動報告会 (p5参照)

* * *

11月18日(木) ●大田区立南馬込児童館

前の週の見学で工作作品に目を奪われた3人。作り方を教わりたいとの希望を快く受け入れていただき、再びの訪問となった。

この日のため、数日前からファストフード店で飲んだ紙コップや、カメラのフィルムケースなどをコツコツと集めて持参。フィルムケースを利用した人形や、2枚の色紙を編む市松模様の小物など、職員の方に教えてもらって、いくつか作ってみた。ラオスに帰ったら子どもたちと作るんだ、と3人ははりきっていた。

●東京見物

<日本にはピーがいっぱい?!>

いわゆる「ガングロ、白髪」の女子高生を間近で見てビックリ。

「あんな格好で学校に行ってもいいの?」

「ラオスであの格好でいたら、みんな『ピー』が出たと思って驚くよ」

ちなみに、ピーとは「お化け」のこと。

* * *

11月19日(金)

●手の教室 (大田区)

粘土で遊ぶ子どもたちの様子を見学。

●昭和のくらし博物館 (大田区)

<日本とラオス「お産」あれこれ>

日本の一昔前の暮らしを見て、ラオスの暮らしと共通点が多いことを実感。日本に、出産の時に「ひもにぶら下がる」風習のある地域があったという話を聞いたプアチャン。「私が長女を産む時、陣痛で苦しんでいたら、お母さんがひもをつるし

てぶらさがるといいのよって言ったわ。医者ほ、そんなことないって言ってたけど」彼女には8人の子どもがいて、8枚の写真を持ち歩いている。

* * *

11月20日(土) ●くさっぱら公園 (大田区)

住民と行政が話し合いながら作り、運営している公園。ブランコや滑り台はなく、いろいろな木が生え、丸太が転がり、土のにおいがする。

ワークデーだったが、集まったのは大人のみ。掃除をする人、テーブルを用意する人、木に登ってみる人など様々で、3人とも少しとまどい気味。しかし「私どもの頃よくこういう遊びしてたのよ」とブアチャンはニコニコしながら木の枝に結ばれたロープにぶらさがり、ソンペットは慣れない腰つきで鉋をふるって、種まきを手伝うなど、それぞれ作業や遊びに参加した。

自然に囲まれ「公園」がないラオスから来た3人に、この公園の意味を伝えることが難しかった。

<ラオス・スタッフの研修の感想から>

ふれあってみると子どもはどこも同じ。
ラオスでも、日本でも。

●小学校

- ・委員会活動は子ども主体で活動させることで、自分たちで考え行動できるようになる。予算がないラオスでもすぐに取り入れることができる。
- ・子どもたちが作成した壁新聞はよい活動だ。
- ・国語の授業では、この話は何を言いたいのかなど話し合いをさせており、子どもは堂々と自分の考えを発表している。自分の意見を述べる習慣をつけることは、子どもが自らを開発させること。
- ・国語の時間に図書館で調べる教育が行われている。ラオスでも、もっと学校に図書室が普及し、利用されるようにしていきたい。

●児童館

- ・子どもと先生がとても親しそうなのが印象的。
- ・時間割が決まっているわけではなく、子どもが自由にやりたいことをやっているのに驚いた。
- ・利用案内や行事の案内を印刷して、近所の子どもや学校に配っている。地域への案内や、多くの子どもに利用してもらう努力を学んだ。

●学校図書館

- ・図書の分類や動物の絵を目印にするなど、小さな子どもにもわかりやすく、自分で本を見つけや

すいように工夫しているのがよい。

- ・図書委員会の活動に注目した。ラオスの学校は先生が少ないので、こうした活動を取り入れたい。

●公共図書館

- ・利用者カードを、区内や市内の全館で共通に利用できるシステムはとてもよい。図書館同士が互いに連携している点は参考にしたい。
- ・図書館内の配置図など、利用者が自分で本を探せる工夫を取り入れたい。図書目録を整備し、問い合わせにすぐ応えられるようにしたい。

●文庫

- ・母親のボランティアで運営されている。今のラオスでは、このような活動はまだ難しい。「親が子どものために本を借りる」ことから始めたい。将来、私たちの図書室を利用して育った子どもたちが、10年、20年後にボランティアとなって、文庫活動を始めてくれることに期待している。
- ・子どもたちがいっそう本を好きになるような「おはなし会」の活動はとてもよい。
- ・「おはなし」の前に、みんなで歌って子どもの注意をひきつける。本を読むだけでなく、いろいろなことに興味をもち、集中する場になっている。

●子どもの本の仕事

- ・絵本の編集者は、子どもの側に立って、子どもにとっていい本とは何かという認識をもってやるべきということを関係者に伝えたい。

●自然とふれあうこと

- ・ラオスではまだ、自然のままというと、貧しいと思ってしまうところがあるが、日本では自然を活かした公園で、大人たちも作業や遊びを楽しんでいるのは驚きだった。
- ・自然を大事にする保育園では、子どもに体験させて学ばせ、先生たちはつねに子どもたちに目配りをし見守っている。
- ・本ばかりでなく自然の大切さも伝えていきたい。自然の大切さをテーマに本や紙芝居を作ったり、子どもたちと劇をしてみたい。

●将来への展望

- ・現時点でラオス政府にいろいろな協力を求めるのは難しいが、子どもたちがたくさん本を読むことで地域の人々などに働きかければ、将来政府も動いていくのではないかと思う。

ラオス人スタッフ活動報告会

11月17日(水) 19:00~21:00 シニアワーク東京

研修半ばの11月17日夜、「現地活動報告会」を行いました。

●サイヤプリ県の読書推進運動

ブアチャン[サイヤプリ子ども文化センター館長]

サイヤプリ県の読書推進運動は、1993年に配付された2つの図書箱から始まりました。ラオスの子どもに絵本を送る会(ASPB)とユニセフからの支援です。読書はサイヤプリの子どもたちにとって初めてのことでした。私はこの仕事を担当しており、とても誇りに思いました。

それ以前は、学校をさぼったり、放課後いたずらばかりしている子どもが多くいました。学校教育は先生が一方的に教え込むだけの方式でした。しかし、一年間この活動をやると、子どもたちは本がとても好きになり、本を借りて家で読むようになりました。大勢の子どもが読むので、学校では本が足りなくなっていました。

現在、サイヤプリ県には383の図書箱、150の図書袋、7つの学校図書室があります。子ども文化センター(CCC)の中にも図書室が開設されています。サイヤプリ小学校の図書室の活動がとても効果的だったので、サイヤプリ県の教育委員会が後押しし、ASPBがスポンサーとなってCCCが設立されたのです。

CCCは月~土の毎日オープンしており、一日少なくとも250人の子どもが利用しています。そのうち図書室の利用者は50~60人です。13~18歳の48人の子どもたちが、ボランティアとして活動に参加しています。

このようにCCCの活動が成功しているのは、県当局が理解し、講師の派遣などに協力してくれて、親や地域社会も応援してくれているからです。現在CCCのスタッフは、みな活動に意欲的に取り組んでいます。そして多くの子どもたちがCCCの活動に興味を持って参加しています。

●ASPB子ども文庫の活動

バンオーン[ASPB子ども文庫担当者]

私たちの子ども文庫は1994年に始まりました。当時は本の数も多くなく、図書館のように本を登録したり分類したりということも、まだしていま

せんでした。担当である自分も、図書室の仕事について何もわかっていませんでした。

実は私自身が、本を読んだことがなかったので、ASPBで仕事をするようになってはじめて本に触れることができ、たくさん本を読みました。私自身も読書を楽しみ、子どもたちにも読んであげました。みんなとても喜んでくれました。その後、図書室のセミナーに何回か参加し、このごろは図書室の活動をうまくできるようになりました。

子ども文庫に来るのは、昔は近所の子どもだけでしたが、いまは保育園児から中学生まで利用しています。近所のお寺の見習い僧や、大人も本を読みに来るようになりました。利用者が増え、希望が多くなったので、いまでは土・日も毎日開いています。

会員は2203人で、蔵書は1009種類、2067冊。平日は学校があるので、文庫に来るのは25人ほどですが、土曜日は80人ぐらい、日曜日は40名ぐらいです。土・日には3~5種類の絵本を選び、読み聞かせを行っています。子どもたちには、物語とかお話の本をたくさん読んでほしいと願っています。

●ASPBの現地活動の報告

ソンベット[ASPBラオス事務所責任者]

<学校図書室>

ASPBが支援している学校図書室は現在42校です(2000年2月現在44校)。学校図書室への要請はたいへん多く、国立図書館には毎年40以上の学校から要請があります。ASPBに直接寄せられるものもあります。毎年予算には限りがあるので、この中から、国立図書館、東京事務所と相談しながら設置する学校を選んでいきます。

図書室を開設するときは、本や図書室を効果的に利用する方法や、子どもたちを惹きつけるためのさまざまな活動の仕方について、担当の教員にセミナーを行います。図書室設置後には、図書の補充などのフォローもしています。各学校図書室から毎月、遠い学校からは2か月に1回の割合で報告書を送ってもらっています。

<図書箱と図書袋>

図書袋や図書箱に対しても多くの学校から要請があります。国立図書館の毎年の計画に基づいてどの地区に配付するかを決めています。ASPBに直接要請が来た場合は、その学校に熱心な先生がいて、何としても子どもたちに本を読ませてあげたいという情熱があることを、配付の条件にしています。

図書箱を配付するときは、配付地区のすべての学校の先生を集めて2日間のセミナーをやります。学校図書室のセミナーと同様に、いろいろな方法を先生たちに身につけてもらいます。

すでに配付した学校をフォローして、図書箱がよく利用されているかをチェックすると同時に、新しい本の補充を行います。本の補充に対しては、他団体の図書箱を使っている学校からも要請が来ています。

<子どもの本の出版>

現在までにASPBは67タイトルの本の出版を支援しており、全部で30万冊ほどになります。ラオス語で出版された本はとても少なく、特に子どもの絵本は少ないです。

ASPBが出版の支援を始めてから、ラオスの作家や画家の輪が少しずつひろがってきました。毎回の絵本づくりセミナー等で、ラオスの作家や画家も少しずつ経験を積んでいます。お話につける絵を描いてもらおうと新聞広告などで募集したところ、絵を描く人がたくさん現れました。

最近では『文字絵本3』の詩に対する絵のコンクールをしました。たくさんの方が作品を送ってきましたが、彼らは日本の絵本作家に見てもらって、助言を受けることはとても勉強になる、と喜んでくれています。

●質疑応答

Q：子どもたちの将来の夢は？

A：あまり情報が無いので自分が何やりたいかわからないことが多く、「軍人」とか、身の回りにある限られた職業しか答えられません。地方都市の子どもだと、田舎で暮らしたいから学校の先生になりたいとか、お医者さんになりたいという子どもも結構います。子どもも政府機関では給料が少な

いと実感しているようで、外資系企業で働きたいと言う子どももでてきました。ヴィエンチャンでは小学校一年生から英語を始める子も。英語塾に行ったり、コンピュータの勉強をする人もいます。

Q：出版物がそれほどまでに無いという理由は？

A：これまでラオスでは本が無い、本を読む習慣も無い、それで本を作る人も少なかったのだと思います。いまは読書推進運動を行っていますので、将来は誰かが本を作ったら、買う子どもも出てくるでしょう。経済的に余裕のある家庭もだいたい増えてきましたが、まだ子どもに本を買ってやるということはほとんどありません。子どもにとって本が大事だということを、親がまだ理解していないからだと思います。それでも昔と比べると少しずつ理解が広がって、子どもに本を買い与える人も増えてはいます。昔の本屋より今の本屋のほうが、たぶん売上げが多いのではないかと思います。

A（東京スタッフ）：多民族国家であるラオスで、多くは口承文化が中心であったこと。フランスの植民地政府が学校教育に関心を示さなかったことも本が少ない原因の一つだと思います。

Q：来日して発見した、ラオスのいいところは？

A：ラオスのいいところは、子どもたちがお互い助け合って、家族のために働いたりするところだと思います。ラオスの子どもたちは、何があっても分け合って一緒に食べたりします。

ラオスでは自然がまだまだたくさんあって、空気の公害がまだあまりありません。ところが日本で飛行機を降りたとたん、すぐ空気の臭さを感じました。これからラオスの子どもたちにも、自然環境を保護しながら開発していけるように、勉強してもらいたいと思います。

私たちの子ども文庫には、学校が休みの日になると子どもたちがお弁当を持ってやってきて、お昼はみんな自分のお弁当をひろげて一緒に食べるのです。みんな仲良く食べてます。ところが日本の給食の風景を見ますと、ひとりひとり自分のものを自分で食べています。ちょっと寂しいような気がします。もう少し子どもたちが一緒になって食べたら、違ってくるのではないかと。これは皆さんへの課題です。

研修の成果と今後の展望

森 透

今回の研修にはいくつかの目的がありました。ひとつは、子どもに関わる数多くの現場を訪れ、多彩な事例に触れる中で、活動のヒントを持ち帰ってもらうこと。地域の中で文庫/学校図書室やCCCが根付いていくには、どんなやりかたがあるのか。大人は、子どもにどう接する中で、子どもを伸ばしていけるのか。そういった実践的なノウハウを学ぶということがありました。

もうひとつは「めざすもののイメージを共有する」ということでした。そもそも何をめざして読書推進活動、CCC活動をするのか。これらについて、学び、語り合い、共有しあおうということが今回の研修のいちばんの目的だったのです。

こうした背景には、私たちは、ラオスの子どもたちが本に親しむ環境、自己表現を楽しむ場をつくることで教育環境を向上させようと、ラオス人スタッフと共に様々なプロジェクトを行っていますが、それを進める上で、東京からのメッセージが、ラオスのスタッフにうまく伝わらないことがあります。それは時にプロジェクトの遅れや、目的や意図と微妙に違う結果という形で現れます。

読書や情操教育が当たり前の日本社会の私たちと、取り組みが始まったばかりのラオス社会のスタッフたち。両者の間で、絵本や、図書館での活動や、自己表現といったもののイメージが共有されないのは、考えてみればあたりまえかもしれません。

今回の研修に参加したプアチャンは、サイヤブリという地域でCCC活動を推進するリーダーです。自ら子どもに読みきかせをしつつ、CCCの職員を育成し、また行政の理解を得るために働きかけ、外国のNGOに運動資金の要請をするという働きぶりの人物です。

そんな彼女と私たちが「めざすもののイメージを共有する」ことで、より戦略的にラオスの教育環境の向上をめざしていける、そうすべきだと考え、研修を行ったのです。

研修の成果といったとき、活動のヒントについては盛りだくさん持って帰ってもらいました（おそらく、彼らが100円ショップで買い集めたお土産よりも多く）。「めざすもの」については、これからの実践の試行錯誤の中で検証されることでし

よう。少なくとも、試行錯誤への意欲はおう盛にして現場復帰しています。手作りの地道な活動も20年、30年と続けていけばこうなるというものはきっと胸に刻んだことでしょう。と同時に、経済大国の矛盾も見つめ、ラオスのよさも再認識できた研修になったと思います。

「めざすもののイメージを共有する」ことは東京のメンバー同士においてもまた求められることでした。実際、研修で訪問した先では、ラオス・スタッフに負けないくらい東京スタッフが学び、それぞれ感想を述べあう中で自分たちは何をしようとしているのかを語り合いました。それは、会の2001年以降のありかたについての議論とも重なり合うものとなりました。今後、より専門性と戦略性を高めた、ラオスと東京のつながりをめざしていきたいと考えています。

2週間の研修の間、大勢の方にお世話になりました。みなさん、ありがとうございました。（訪問順）
本橋千奈さん/大田区立池上図書館/子供の部屋保育園/大田区児童施設係/大田区立南馬込児童館/大田区立池雪小学校/増山正子さん/藤の台文庫/かえて文庫/へそ文庫/町田市立さるびあ図書館/町田市立第四小学校/都立小山台高等学校図書館・図書委員会のみなさん/ドゥアンドゥアンさん・ウティンさん/東京小中学生センター(伊藤忠記念財団)/東京子ども図書館/神奈川県立図書館/長野ヒデ子さん/やべみつのりさん/上地ちづ子さん/久保雅勇さん/有吉有己子さん/大泉ひろ子さん/市川圭子さん/藤原吉志子さん/神奈川県手づくり紙芝居コンクール参加者のみなさん/精興社宮崎彰夫さん/福音館書店井上博子さん/八嶽典子さん/昭和のくらし博物館谷口こずえさん/下中菜穂さん/弘さん/手の教室/くさっぱら公園のみなさん/あさぬまちずこさん/安井清子さん/淵上智子さん/杉山絵理さん/西村麻貴さん/ボランティアのみなさん/赤井さんのお父さんとお母さん/日本財団

お悔やみ申し上げます。

会の現地コーディネーター、ドゥアンドゥアンさんの夫君で、ラオスを代表する作家であるウティン・ブンヤボンさんが、1月30日、病気のため亡くなりました。58歳でした。会が出版した本の内、27冊を執筆、編集して下さいました。今回の研修にも参加されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

2001年以降の活動のありかたについて

1月16日 日帰り合宿第2回報告

2001年からの会の活動方針について話し合う日帰り合宿の2回目が昨年9月12日に続き、1月16日に行われました。これまでの会の活動を総括するとともに、今後の活動方針を考える重要な話し合いとなり、前回出された会の「組織化」についての意味の確認から話し合いが始まりました。

■「組織化」の意味

組織化とは、やりたいことをやるのではなく、「すべきことを判断し、責任を持って遂行していく組織としての体制を作っていくこと」、という確認がなされました。

個人としては、これまでも言われていた片手間ボランティアであっても、会としては組織化をめざし、会として何をすべきかを、個人の担える部分と切り離して考えることが大切であり、そのことにより、個人の過大な責任を少しでも減らし、いろいろな人を育てていくことができると思います。

■活動理念の確認

会は、「人生の選択の自由をもてる社会へ向かって、識字と自己表現を通して、その社会を実現させようとする運動体である」という理念が、以前から大まかな合意としてありましたが、これを再確認しました。

<組織としての体制づくりについて>

上記の2点をふまえ、会の「組織運営」についてどのような方法を取るべきか、話し合いました。

●事務局の強化

- ・専従のマネージャー（有給専従の事務局長か）が必要。
- ・事務局がやるべきことをはっきりさせる。
- ・時間をかけて人を育てる。
- ・理事会と事務局を分けるべきか。

ASPBには理事会がない。現在行っている運営会議がそれに該当すると考えると、意思決定機関と執行機関が一緒ということになる。これで良いのか。今の良い点は、皆が会の方向付けに参加できるということ。悪い点は、決定及び責任が曖昧になり、また時間がかかり過ぎること。

- ・部分的作業はアルバイトに依頼する。
- ・会議に人が集まりやすい方法を探る。

●会はプロデューサー的存在に

プロジェクトの専門化を図る上で、会はネットワークの要となり、専門家を巻き込み、専門家ボランティアを育てていく。

●日本人現地駐在員の必要性

現地主体を保ちながら、その体制を強化し、また情報収集の意味も含め、短期ではない現地駐在員が必要。

<これからの、会としての展望と抱負>

- ・政策提言能力
- ・これまで会が培ってきた、絵本づくりのノウハウ等を、必要とされる他の地域の人々とも分かち合うこと。
- ・日本でのラオス紹介。日本の子どもたちに、世界に多様な価値観があることを知らせるのは、ラオスでの活動と等価値の重要性をもつ。

ここで話し合ってきたことは、基本的には9月12日に話し合ってきたこととほぼ同じだと思いますが、組織運営強化を推進すると確認されたことが、大きな前進と思われます。

「片手間ボランティアたる個人の集合」から、やるべきことを責任を持って遂行する「組織」としてのあり方を選択したことは、会として大きな路線転換です。

今後、具体的な方策を早急に見だし、総会に諮り合意を得ることとします。2000年までの体制と2001年からの活動方針を話し合い始めて、久しくなります。この間、ラオス、日本、世界の情勢も、ラオスの教育環境も変化してきています。会の活動の方向も、こうした変化をふまえ、何が必要とされているかを、これからもきめ細かく見つめていくことが、求められていると思います。

*ご意見などがありましたら、事務局までお寄せください。

指定募金関連プロジェクトの報告(1999年3月-2000年1月)

「寄付のいろいろ 1999/2000年版」でご案内した「指定募金」に、たくさんの方々のご寄付を下さいました。本当にありがとうございました。

■指定項目別の寄付内訳 (1999年3月-2000年1月)

	募金総額	のべ口数	寄付者・団体数
絵本印刷	128,879円	86	45
子ども文化センター	150,000円	15	11
図書袋	300,000円	20	11
学校図書室	470,000円	3	3

ティア貯金の助成により、120の図書袋を製作。4県に配付しました。うち20袋が指定募金による製作、配付です。図書袋には約70冊の図書を収納し、各学校に中身の違う2種類の図書袋を配付。山間部の交通の便のよくない小学校、合計60校に届けることができました。

【絵本印刷】

■約430冊の印刷費用として

大変多くの方々にご協力いただきましたが、印刷に必要な金額に達せず、昨年中には実行することができませんでした。現在、出版する候補を現地と相談しており、本年度前半に印刷予定です。この指定募金により、約430冊の図書が印刷できることでしょう。詳しくはまた完成次第報告します。

■配付校の地域別内訳

配付地域	図書袋数	学校数
ボリカムサイ県4郡	40	20
カンムアン県2郡	20	10
サワンナケート県2郡	20	10
サイソンプン特別区	40	20
合計	120	60

【子ども文化センター】

■2センター、7講座の運営費として

当会が運営支援している全国4ヶ所の子ども文化センターは、それぞれ、週に8~10程度の様々な講座を行っています。その中で、サイヤブリとルアンパバンの2ヶ所のセンターの、合計7講座について、指定募金よりご支援いただきました。これらの講座は、どれもとても人気が高いものばかりです。なお、この募金は1口が3ヶ月間の支援なので、ご寄付いただいた口数によって支援期間が違います。2名で一つの講座をご支援いただいている場合もあります。

■支援講座名と期間

サイヤブリCCC	伝統音楽	99年7月-00年6月(1名)
	織物	99年7-9月/10-12月(2名)
	お絵かき	99年7-9月/10-12月(2名)
	伝統舞踊	99年7-9月/10-12月(2名)
ルアンパバンCCC	伝統音楽	99年7-12月(1名)
	織物	99年7-9月/10-12月(2名)
	お絵かき	99年7-9月(1名)

【学校図書室"HakArn"】

■3校で開設

指定募金に加えて、外務省NGO補助金の助成や個人寄付により、4地域、合計8ヶ所に図書室を開設できました。うち3ヶ所が指定募金です。99年12月現在、会が支援する図書室"HakArn"(ハックアーン)は全国で42ヶ所になりました。開設にあたっては国立図書館とASPBのスタッフが指導に行き、学校の教員や生徒達と一緒に整備をします。開所式には、理解と利用促進のために周辺の村人にも参加してもらっています。これらの図書室には今後も、年1回の図書補充をはじめ、必要に応じてフォローアップをします。

■学校名とご支援いただいた方(敬称略)

"HakArn"NO.35	ホアクア小学校	若林地所株式会社
"HakArn"NO.36	サバントンヌン小学校	東京海上火災保険株式会社
"HakArn"NO.37	サイセッター中学/高等学校	村井浩 (所在地はいずれもヴィエンチャン市内)

【図書袋】

■20袋製作、10校の小学校へ配付

指定募金と国際開発救援財団、郵政省国際ボラン

なお、この指定募金は今年度も、引き続き同じ内容で募集しています。よろしくお願いいたします。

東京事務所から

●「文字絵本3」キャノンの支援で出版へ



1999年12月、キャノン株式会社の社会・文化支援室より、社員向け「チャリティブックフェア」の収益金と会社からのマッチングギフトを97、98年に続いて、本年度もご寄付いただきました。今回は、文字絵本シリーズの3冊目の出版資金に加え、学校図書室の開設資金として使わせていただくことになりました。どうもありがとうございました。

●札幌「NGO屋台村」に参加

1月29、30日、札幌市で開かれたイベント「NGOとこにちは！NGO屋台村」に招かれ、小川が出張。活動紹介に、市民の皆さんは熱心に耳を傾けてくださり、関心の高さを感じました。三笠市から手伝いに駆けつけた工藤さん(保母さん)がラオスの紙芝居を上演。市内の支援者の方、ラオスからの留学生、いろいろな団体の方と交流することができました。

●国際ボランティア貯金普及協会「開発途上国・NGOとの現地交流」現地プロジェクト視察

1月29日～2月4日、国際ボランティア貯金普及協会の主催で全国のおビニオンリーダー13名による交流団がラオスを訪問。ラオス事務所、ポリカムサイ子ども文化センター、学校図書室の学校、図書館の学校などを訪れ、子どもたちの活動などを見学しました。会からは代表のチャンタソンが同行しました。

お知らせ

●今年もやります！ラオスのお正月パーティー

「サバイディー・ピーマイ・パーティー」

日時：4月23日（日）午後1時30分～4時

（受付は1時から）

会場：京浜急行「京急蒲田」駅徒歩1分

またはJR「蒲田」駅徒歩10分

東京ガス 4階ホール

参加費：一般4000円／大高生2500円

中学生以下無料

協力：東京ガス南部支店

4月のラオス正月に合わせ、ラオス料理の立食パーティーを開催。活動報告や絵本の展示、織物の販売

東京事務所の動き 1999年11月～2000年1月

●11月

6日 ラオス・スタッフ3名研修のため来日（～20日）

7日 池上梅園の和室でラオス人スタッフと支援者の交流会

13日 香川県国際交流協会「国際協力シンポジウム」でチャンタソンが基調講演

14日 神奈川県手づくり紙芝居コンクールのやべみつのりさんの記念講演の中で、プアチャンとバンオンが紙芝居をゲスト出演

17日 ラオス人スタッフによる現地活動報告会

19日 国際ボランティア貯金普及協会「国際協力報告会」でチャンタソンが講演

23日 NHKラジオ日本の番組「サバイディー・ヴィエンチャン」（ラオス国営放送局から生放送）にチャンタソンがスタジオ出演

26日 NHK BS-2「ボランティアネット」で絵本2000冊運動が紹介される

●12月

1日 JVCのラオス担当山口さんと小川さんが来訪

3日 国際建設技術協会で野口が報告

8日 キャノン株式会社社会貢献室の宮崎さん、大浦さん来訪。共同通信の津山さん来訪

8日・10日 チャンタソンが赤羽若淵小学校で国際理解の授業

14日 アジア民話文化交流会の斉藤さんが来訪

15日 チャンタソンと赤井が国際開発救援財団訪問

22日 キックマンコンピュータクラブ会合に小川が出席

●2000年1月

20日 ミクプランニングの加藤さんが来訪

22日～26日 JANICのNGO新人スタッフ基礎力アップ講座に小川が参加

26日 郵政省NGO懇談会に赤井が出席

29日～2月4日 国際ボランティア貯金普及協会「開発途上国・NGOとの現地交流」現地プロジェクト視察にチャンタソンが同行

29日～30日 札幌市で行われたイベント「NGO屋台村」に参加（小川）

なども行います。ぜひご参加ください。

お申し込みは東京事務所までお願いします。

TEL/FAX 03-3755-1603

●ピーマイ・パーティーお料理ボランティア募集！

お料理が得意な方、ラオス料理に興味がある方、パーティーの料理づくりに参加しませんか。

4月22日（土）午後、買い出しと仕込み

4月23日（日）朝9時から調理と配膳

*事前登録者に限り、パーティー参加費の割引があります。詳しくは赤井までお問い合わせください。